

演劇・演芸の通常興行における出演頻度格差に関する集計

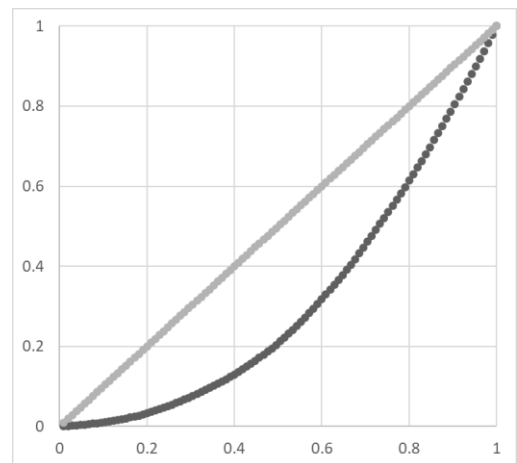
(公財) 統計情報研究開発センター 坂部 裕美子

1. はじめに

実演芸術で現在、一定のサイクルで出演者・演目を入れ替えながらほぼ一年中興行が行われており、かつその興行史が相応に長い分野としては、歌舞伎、宝塚歌劇、落語、そして吉本新喜劇（ただし分野単独の公演ではなく公演プログラムの一部としての上演）などが挙げられる。

これらの通常興行についての一般向けの説明は「劇場に行けば毎日上演されている」という内容に留まることが多く、実際の各演者の出演状況にはほとんど触れられない。しかし、興行出演者データを集計してみると、実はどの分野でも、各演者が均等に出演の機会を得られているわけではないことが分かる。

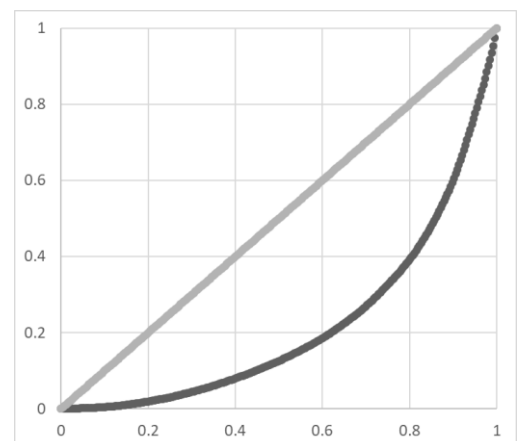
図1 吉本新喜劇本公演出演者



2. 本報告における集計対象

この出演頻度の格差の現状を把握するために、今回は、年間興行数が比較的多く、かつ近似している落語（定席興行）と吉本新喜劇について、各演者の2018年の通常興行への年間出演回数を集計し、それぞれの不平等度をジニ係数を用いて比較した。

図2 落語協会定席興行出演者



3. 結果（抜粋）

右の図1は、吉本新喜劇劇団員の本公演への出演回数についてローレンツ曲線を描いたものである。ジニ係数を計算すると0.38となる。

図2は、落語協会所属の落語家と講談師の定席興行への出演回数についてのローレンツ曲線である。同じくジニ係数を計算すると0.56となり、吉本新喜劇に比べるとかなり格差が大きい。

ただし、「各演者に均等に出演の機会を与える」ことが、芸能興行の世界で望ましいと言えるのか、には議論の余地がある。このことについては、他協会主催の落語定席興行の集計結果との比較も併せて、当日詳述する。